續羣書一覽

八

1加2
765
8

門 4 2
騅 卷

紀行之部
畫圖之部
緣起之部

續群書一覽

未

賣雜書一覽

未

行廿字

紀行之部

一　須磨記　写　一冊

菅贈太政大臣道實公撰

此御記昌泰二年二月菅家大納言より内大臣を越任して右大臣に昇りませしより明る三年睦月廿日太宰權師にて都を出たゝせ須磨の浦にいたらせ給ふ迄の記なり

按するに此記こと葉つかひふるめかしく書なせりかくや姫白太夫のことまてのせられ

たるは不審しき事にて既に桂秋齋本居宣長
の説を引て群書一覽にも偽書なりとせり伴
蒿渓國文世々の跡に其さま古風なり云々と
見ゆ又壷井鶴谷羽は此記を信し本文のかたわ
らに朱字を以て委く注を加え再三校合にカ
を盡し自寫して北野の聖廟へ納む其見る処
の異なる也今壷井氏を案に擧く其奥書に曰
再三校合加朱字傍注畢　壷井義知判
寛延二年己巳三月五日寫之
北野社官　十河能範判

一冊

一　難波紀行

大納言源義詮卿撰

貞治三年四月上旬山城淀より舟にて下向難波
の浦に着き田みの島にありて野田の藤花を
詠め夫より天王寺住吉等を遊覽ありし紀行に
て鶴千代とのへ義詮と之名宛あり鶴千代は義
滿將軍の幼名にや

住吉四社明神をおがみ奉りて

四方の海深き誓や日の本の民もゆたかに住
吉の神

一　石山月見の記　写　一冊

三條西内大臣公條公撰

天文十四年八月十四日江州石山寺へ月見とし
て御發途連歌師宗艱紹巴金后の三人を召具せ
られ同十五日は御會あり名號首題十六首の和
歌各あり浩月江山之御詩金后之次韻天龍寺江
心和尚之和答を附録にす同廿日世尊院廿一日
岩之坊等にて發句之御會あり

秋風や月も浪たゝこゝの海　金后

一　勢州紀行　写　一冊

十行廿字

北村季吟著

元禄二年九月十日同十三日伊勢内外之宮の御
遷宮を拜まむと京師よりまうつるの記也

かも川をすくとて

曉天命駕道横縦　親戚送行情已濃
唯是樂遊非旅客　老妻新婦共相從

都いてゝまつ打わたす鴨川の千鳥もおのか
友さそふらん

和歌五十九首と詩六首を載たり季吟翁此比は
新玉津島神社に假居の時なり

一　丙辰紀行　一冊

羅山林道春著

元和二年丙辰武州江戸より京都へ帰らるゝ時の紀行にして倭字の序あり名鏡の景状を記し道々の神社佛宇の由来をも粗ほ著せり干時道春三十歳の作なり

一　東関之記　一冊

宗彭澤庵禅師著　写

寛永十三年丙子十一月七日江府を發途して紫野大徳寺之開祖大燈國師之三百年忌に相當り上京せらるゝの紀行なり

世上光陰下坂車　歳云暮矣欲帰家

士峯白雪看無飽　又思長安一日花

此記詩歌をまし多あたり且巻後に報牡丹詞矢野氏にこたふる辞并の方に遣す文以上三篇の文を載す

一　癸未紀行　一冊

羅山林道春著

寛永廿年癸未十月後光明天皇御即位之儀を被為行により林翁羅山其子春齋向陽子父子共に

江府より京師へ上らるゝ時の紀行せ羅山六十
一向陽廿五の作と云
一遠遊紀行　一冊
闇齋山崎垂加著
明暦四年の春山崎嘉右衛門京師より江戸へ往
復之紀行にて詩を專とせり
一再遊紀行　一冊
闇齋山崎垂加著
萬治二年山崎闇齋五十二歳之時東武再遊之詩
を集めたり洛陽を發足し江府に到るまての景

狀を五言六百二十句三百十韻の詩一篇に述へ
たり帰洛之節の詩は多くは絶句なり
一常陸帶　写　一冊
安藤内匠頭定為入道朴翁著
撰者朴翁は伏見宮貞清親王之家臣にて水戸侯
に仕えし年山為明の父なり丹波國桑田郡千歳
山の麓に在住し水尾村を過き清瀧川を渡り山
城の上嵯峨を經て都に入る所々の名所の和歌
を記し元祿十一年戊寅三月十二日京師を發足
して常州水戸へ下向の紀行にして中納言光圀

卿に面謁種々の御談あり夫より筑波山へ登り
野州日光山に参詣し又水戸に帰るの日記なり
巻末に餞別之詩歌を録す

帰るへき道もおほへす旅衣名殘をおもふ花

扑翁

一 富士一覽記

梅月堂宣阿著

宣阿は周防國岩國之藩士香川正矩之次子なり
諱景継号竟真夙に京師に来り自ら一家を成し
集外歌仙之一人なり元禄八年四月十一日富士

行廿字

一覽のため巖阿法師井上隨入をいさなひて都
を出同廿三日遠州白須賀塩見坂より富嶽を望
み

氷雪成堆千万丈　當頭深洞住仙妃
負天肩背雲烟外　疑是白鵬息未飛

山々はまた明ぬよの雲の上に白きをみれは
雪の不二の根

かねては此山の麓までと思ひまうけしに伴ひ
し中にさはる事いできて是より帰られし道々
の記なり

茲甲午九月値百回忌辰玄孫長門介景樹梓行之

巻首天保五年七月八日従四位下隠岐守豊原文

秋序また奥書に曰

ことし高祖父の君百回忌に當らせ給へる追

福の為そのかみしるし置せたる富士一覧記

を梓につけて世に弘くせむとす其巻をしる

さいけ備ふるとて書そへて奉る二首

雲井まて聞えあけたるふしの根の雪の調は

千世も轟に

言の葉の花に遊ふらん百年のこてふの夢は

覚すともなし

一 游東阪録　長門介平景樹

松崎慊堂復著　二冊

文政元年五月奥州松島游覧之記行なり

一 攀晃山記　一冊

林大學頭既著

天保十年四月十四日江府を發し野州日光山に

趣き同廿五日家に帰るまての紀行にして巻後

に日光山吟草廿五首を附録にす佐藤坦の序あ

り

一　自叙録　　写　一冊

菅真静棠昭著

棠昭は備前少将光政朝臣に仕へ泉八左衛門仲愛熊澤了介之弟なり之女を娶り學術頗る長したる人なりしか病によりて退職し京師に留る事二十有余年其中に江府に下り或は加州金澤に遊行する等の記あり貞享の比より正徳三年まて世上之珍事または其身の苦樂のさまとも編中に多く記載せり

一　庚子道之記　　一冊

白柏子武女著

橘千蔭之序平春海跋清水濱臣之標注

此道の記は享保のころ白柏子武女といえるか尾張の名古屋よりいてゝ江戸へかへれる折の日記也歌文目出たきこと和漢の學にすくれたる才識に古今にたくひすくなき筆すさひなり

一　日光山御紀行　　写　一冊

水戸中納言齊昭卿著

天保十年四月十日穂川将軍家日光山へ御社參ありしによつて中納言齊昭卿にも同しく詣給

ふの紀行にて詩歌を取交て四十四首を載らる
此紀行は松齢といへる人の輯むる処にて其姓
名不詳奥書に齊昭卿の唐やまとの歌をうつし
奉りて
玉くしけ其ふた歌をなみならぬたふとき君
の形見とそおもふ
一　東韃地方紀行　写　二冊
間宮倫蔵口述村上貞助編纂
巻端文化七庚子年秋七月秦貞慶之凡例
此篇は本蝦夷地ソーヤを發して東韃徳楞に至

る之紀行にして間々圖繪を加へ物産を明細に
記し且里程おゐ粗知らす撰者倫蔵は蝦夷地の
事に深く心を勞し其比航海も容易にならさる
ユトロフ及ひクナシリまても渡り實地を経験
したる慷慨之志士にして當國開拓説を主張せ
し矯矢とも稱すへき人也
一　秋錦雜記　写　一冊
北原其著
慶應三年丙寅長月廿七日父光吉之都の任はて
い東海道より奥州若松へ帰國の紀行也同神無

月廿一日家にかへり同廿五日に終る

新居のわたり雨はいみしうふりいてたる

いさやその笠とりいてよ浪風のあらゐのわたり時雨ふりきぬ

富士をよめる中に

筆にたにおそはぬものをふしかねのこゝろたかくはなと思ひけん

都計四十七首の和歌あり

一冊

石川紀行

一

三浦義徳著

此書ハ享和二年河内國ニ傳ヘシ古キ世ノ物ハ南ノ郡ニ多シトテ同地ニ到リ川上ノ岩船山石川ノ神下山釋尊寺交野・御野高福寺法貴寺牧岡ノ神社往生院高安玉祖ノ神社恩智村大御食津ノ神社雁林堂通法寺大黒寺其外古跡ヲ委シクシ鐘銘碑石等ノ年歴ヲモ記シ諸書ノ誤リヲ正シ古物ノ事ヲ多ク擧ケタリ

畫圖之部

一　勅封校倉寶物圖　一卷

南都東大寺正倉院勅封御物之圖之寫也其所載之品錄

黃熟香（又名蘭奢待）　紅沈香（又名大紅塵）　十六股鹿角

長サ三尺一寸　轡二口　御弓（但弦竹）　竹手柄（三筋）

御鞍　鞦　脇息　子ノ日鋤（柄銘文天平宝字二年正月）　玳瑁御杖（二杖）　玳瑁如意（柄象牙一尺七寸）　小

枝笛　漢竹笛　瑪瑙笛　象牙笛　大佛開眼

行廿字

筆 丈二尺七寸　墨　計筭 珊瑚瑪瑙 二本　象牙笏

柄香爐　誦数 瑪瑙水精 黒檀木　四連　大蠻琴 四線

琵琶 五線　箙　拂子　瑪瑙石盤 長七寸　碁

盤二面 石珊瑚瑪瑙　瑪瑙硯　雙六盤 唐木　香筥

天皇御沓　仙人沓　白瑪瑙鉢 經七寸　唐銅

水瓶　瑪瑙水瓶　磬臺　金鉢　金紫銅花瓶

黒塗酒器　瑪瑙火鉢　銀壺 二　銀鍋　御倚

懸　鴨毛屏風一双 但十二枚　銘文 片八漢字 片八古文字

種好田良易以得穀　君賢臣忠易以至豊

諂辞之語多悦會情　正直之言倒心逆耳

正直為心神明所祐　禍福無門唯人所招

父母不愛不孝之子　明君不納不益之臣

清貧長樂濁富恒憂　孝當竭力忠則盡命

君臣不信國政不安　父母不信家道不睦

奥書

以上聖武天皇御遺財也崩後孝謙天皇并光明

皇后有旨悉被施入昆盧舍那佛之宝倉　帝王

御代々之勅封也

此奥に御宝物目録を載たり

一　南都正倉院御宝物圖　三巻

此巻は御物を真写し彩色を加え真に迫りたる
圖なり

脇息三 桐紫檀 螺田 黒漆木器二 冠筥 黒漆 木
地唐櫃三 黄熟香箱 同内箱 黒塗筥 極彩ノ 摸様七圖 鉢 銀
器 金銅三種 内一銘 東大寺枚幡鎮鐸 天平勝宝九年三月二日
瑠璃水瓶 玳瑁如意四本 如意筥 大佛開
開筆 班竹銘 文治元年八月廿八日 開眼法皇用之天平筆 五色唐紙
一帖 鈴 金銅 金銅鉢 三尺九 瓔珞ノ玉五
色 数箇 小刀 一鞘二 三刀鞘黒漆 子ノ日鋤 篳篥
東大寺女儛撫要 裏書 天平勝宝四年四月九日

行廿字

平絹 花盆 木器 四絃琴 琵琶 撥 朱塗
木弓 二種 書巻 拂子 染毛 沓 皮沓
鞆 黄熟香 五尺一寸 紅沈 三尺四寸 障泥
皮 象牙尺 二 鎗 五筋 轡 箙 二種 矢 五
筋 木地唐櫃 摸様 緑 五圖 鴨毛屏風 四
絃琴 腹玉螺蛔装 琵琶 腹玳瑁螺蛔装 面懸 金銅
器 鞍 文鎮 石ヲ染タリ 硯瑪瑙 玉箒 一尺四寸斗玉
三色

一 太神宮神宝唐鞍駒形圖 一巻
唐錦鞍覆 御鞍 連著鞦 村濃差縄 金銅

鑣　鐙　服帶　二　手綱　鞭　白馬形　以上

之圖

奥書

安永八年三月上澣　龍作花押

一　賀茂別雷神社并攝社等内外陣御神服諸器圖　一卷

山城國愛宕郡賀茂神社之諸器圖にして則如左

御幣　御冠　御袍　御襲　單衣　表袴　大

口　指貫　御直衣　御打帶　大袖　小袖

御袷　水引　壁代　御襪　幌　辛櫃　釵袋

矢袋　弓袋　鋒袋　几帳　帳臺　御茵　御

八重盃　石帶　飾太刀　野太刀　檜扇

笏　柳筥　淺履　草鞋　糸鞋　弓　矢

鉾　箸　以下三十種程略之本宮權殿同樣也

次に貴布禰社片岡社奈良澤田氏神同斷也

奥書

右之一冊は安永六酉年御造營被仰出經覺神

服方に付圖并裁切方寸法織地少々宛張置之

享和元酉年同被仰出經覺評定中に付御造營

掛り兼神服方に付寸尺等凡以圖勒之

岡本經覺

同社之神宝は此圖に漏たるは無し克々盡しる

一　日御崎御宝物圖　一巻

巻首に明應九年申九月廿三日御經島沖江蓬莱出現當浦之者罷出靈竹三本切採内一本國主京極治部少輔政經江日御崎檢校野政忠より多賀新兵衛經忠を以被差上依之政忠之奉書一通經忠之披露状二通合三通之寫を載る又宝物之圖は如左

靈竹之圖　二　矢之根　大厂股　古硯　裏銘　建安十四年　甲冑　篭手　半首　脇楯　膝當　太刀　軍扇　二　采一握　嵯峨天皇御献物鐵鞭　新田義貞朝臣鐵鞭　朝鮮人兜

以上

此頃京極氏は出雲隱岐両國之守護職たり

一　釋奠之圖　一巻

畫者詳かならす此圖は中世迄大内裡に於て年々春秋恒例として執行ありし釋奠之規式圖也

其次第は

一廟門著座之圖

門臺に上卿及参議左右に對座門内には

史生史外記左右に分る

一庭座之圖

少納言辨は帳下に著し使部官掌庭上に著座主水正は水器を携へたり

一拜廟之圖

正面に先聖先師左右に十哲之画像を掛け贊者二名は其下敷瓦に並立上卿參議二名は正面を拜す其次に五位三名並立す

一都堂之圖

三道之學士四名板縁に並立す座主博士は正面の高座にあり音博士はこれに對し左右の高臺には問者と贊者は相對し上卿參議辨少納言外記史式部大輔三道博士等は三方に著座す

一廳堂饗圖

上卿の前に酒正あり參議と辨少納言は其前に左右に對座外記王卿は上卿の側にあり學生は其横座せり六位學生は這之下に著座す

一宴座之圖

公卿之座如初惣て文章博士は五位之装

東たり

一両槐門圖　一巻

大永甲申應鐘戊申城南新林孤槐陶家居士筆舊

本を寫す九條関白尚經公之真名序あり

成興院　本槐門　陶原　皇嘉門院　月輪

以上両槐門之圖なり又奥書に曰

此一巻藤森祠官之所持也有子細令書寫之此

両槐門圖有異本坊城前大納言所持也追而可

寫九條家御傳来之本重可申請也

正二位藤原頼胤判

一　法隆寺宝物圖　三巻

大和國班鳩法隆寺聖德太子御傳来之什寶録也

七種御釼　牙笏　御沓　木弓（稱梓真弓）　胡籙

矢　鐙　琴　銅斗　大量　壓尺（稱周尺）　銅簫

鞨鞁牀　賢聖瓢　銅鏡　孝謙天皇御褥　鸚

鵡形鍈代　韓櫃　簪　風爐鏖尾　刀子　燈

臺　油注　針筒　水注　鋸　柄香爐　用明

天皇宸翰法華經八巻所盛經筥　小野妹子将

来經筥　經机　鐵鉢　錫杖　神代古鈴　金
山寺香爐　大定十八年八月ノ銘　水瓶　孝謙天皇納賜
勅書　無垢浄光塔　念珠　竹帙
以上十中之八九當今宮内省の御物となりたり
一　大臣影　二巻
豪信法印筆
花山院右大臣家忠　花岡左大臣有仁　中御門
右大臣宗忠　宇治左大臣頼長　八條太政大臣
實行　中院右大臣雅定　徳大寺左大臣實能
京極大政大臣宗輔　九條太政大臣伊通　三條
内大臣公教　大炊御門右大臣公能　中御門内
大臣宗能　中御門左大臣経宗　福原太政大臣
清盛　花山院太政大臣忠雅　土御門内大臣
通　妙音院太政大臣師長　小松内大臣重盛
八島内大臣宗盛　後徳大寺左大臣實定　冷泉
内大臣良通　三條左大臣實房　後花山院左大
臣兼雅　禪林寺大政大臣兼房　中山内大臣忠
親　六條太政大臣頼實　土御門内大臣通親
大覺寺左大臣隆忠　坊城内大臣實宗　花山院
右内大臣忠経　近衛右大臣道経　八條左大臣良

輔野々宮左大臣公經　坊門内大臣信清　淨
土寺太政大臣公房　鎌倉右大臣實朝　近衛左
大臣家通　後久我太政大臣通光　西園寺太政
大臣公經　大炊御門右大臣師經　以上卷
醍醐太政大臣良平　常盤井太政大臣實氏　後
土御門内大臣定通　月輪内大臣基家　淨土寺
右大臣實親　嵯峨内大臣家嗣　衣笠内大臣家
長　堀河内大臣具實　後花山院太政大臣定雅　冷
泉太政大臣公相　德大寺太政大臣實基　九條左大臣道良
京極右大臣公基　山階左大臣實雄　後三條内大臣公親　香隆寺内大臣冬
忠　後花山院太政大臣通雅　三條坊門内大臣
通成　花山院内大臣師継　後久我内大臣通基
堀河太政大臣基具　西園寺太政大臣實兼　嵯
峨太政大臣信嗣　山本太政大臣公守　土御門
太政大臣定實　後德大寺太政大臣公孝　二條
太政大臣實重　竹林院左大臣公衡　栖心院内
大臣内實　後淨妙寺左大臣經平　後岩倉内大
臣具守　後山本左大臣實泰　今出川右大臣公
顯　押小路内大臣公茂　花山院右大臣家定

行甘守

六條内大臣有房　後一條坊門内大臣通重　後
花山院内大臣師信　光福寺内大臣冬氏　今出
川右大臣兼季　以上
奥書
大臣影豪信法印筆也銘染愚筆了不可出囲外
了　至大臣八十人像藏在陽明藤太閤之家焉
其像則僧豪信所畫而其跋語未詳其人也云畫
様字體一照原本搨寫者著色装成二卷藏之於
東武秘府寶永六年十月十八日
一　武将影像集　一卷

此集は洛中外の諸寺院に所藏する処の影像を
輯めたる處にて其各圖毎に原本之所在を記せ
り其武将には
坂上田村麿　源　牛若丸　平相國清盛
内大臣重盛　等持院尊氏　鹿苑院義滿
佐々木氏頼　細川　勝元　右大臣信長
豊太閤秀吉　小早川隆景　齊藤　道三
右大将頼朝　主計頭清正　織田　信忠
黒田　如水　甲斐守長政　小早川秀秋
豊臣　秀次　源三位頼政　寶筐院義詮

嶋津忠久　源　為義　鎮西　為朝

慈照院義政　熊谷直實　飛彈守氏郷

細川政元　六孫王經基　以上廿九人也

一相撲之圖　一巻

此圖は惟高惟仁兩親王の御位爭ひに名虎能雄の兩人相撲の圖五段に画き詞書を少しく添へたり考證になすへき繪にあらす古き戯画なり

奥書

右件之圖者本是繪所預土佐之祖從五位下內匠頭基光并息男阿闍梨公及巨勢公特之所圖也

一尚歯會記　一巻

正親町正二位實連卿画并詞書和歌共

承安二年九月十二日於洛東寶莊嚴院行之

藤原清輔　六十五　詞書并

ちる花は後の春ともまたれけりまたなくおしきわかさかりたも

藤原敦頼　八十四　神祇伯顯廣王　七十八　李

従五位下刑部權大輔藤原光成　花押

元禄九年丙子九月之吉

部侍郎永範 七十一
位賴政 六十九 大江維光 六十三 祝部成仲 七十四 源三
太宰大貳重家 皇后宮亮季經 盛方 伊豆
守仲綱 賀茂政平 藤原憲盛 祝部元成
藤原尹範 僧顯昭 暮春見尚 蕃會和歌各詠
之

一 病草紙 殘闕 一卷

土佐守光貞画
餓人尸を喰ふより種々の奇病の画を擧く
二冊

一 集古圖説

蜂谷廣成圖畫
卷端享保八年七月三好東閣汝諧正德乙未春三
月新井筑後守君美之両序新川平元成跋次に享
保十九年五月朝倉景衡凡例あり此圖説は荒井
白石之遺稿を景衡之輯録する處なり其圖は
石清水八幡宮藏源義家朝臣 簏
上野國新田後閑家藏源義家朝臣簏同旗袋
大和國吉野郡和田村民藏乃保利乳付簏同古
簏
太秦廣隆寺藏上宮太子團扇

上野國新田後閑家藏源義家朝臣摺扇

大和國大安寺八幡宮藏神功皇后御弓

同　法隆寺藏上宮太子御弓

山城國靜原二宮山王藏天武天皇御弓

南都東大寺正倉院御寶物圖聖武天皇彈弓

攝州天王寺藏上宮太子鳴鏑

和州法隆寺藏上宮太子矢

同　大安寺八幡藏神功皇后御矢

南都正倉院御寶物圖矢

土佐國五臺山藏能登守教經鐵矢頭

鎮西御曹子為朝鏃同鏃

下野國那須湯泉權現藏余市資高鏃

山城國靜原二宮山王藏天武天皇墓目

吉部秘訓圖矢拾

天照太神宮御神寶圖靫

羊中行事賭弓鞆著圖

太神宮御神寶圖錦靫蒲靫革靫

和州法隆寺藏上宮太子靫

泉州人藏竹箙　狩箙

山城國靜原二宮藏天武天皇御鉾

南都正倉院藏聖武天皇御寶物圖御鉾
攝州天王寺藏丙毛槐林釵同藏七星釵
同　藏聖德太子像釵
太神宮御寶物圖玉纏横刀同須我流横刀同新
作横刀源義家朝臣鞘卷
水戸家藏兵庫鎖太刀
武州熊谷寺藏直實鞍
南都正倉院藏御寶物圖蒺藜銜
鉾抄圖輪無銜
和州法隆寺藏上宮太子壺銜

十行廿字

同藏上宮太子鉸具　鉾抄圖鐙
南都正倉院藏御寶物圖壺鐙　鏡四方手
同　春日社神殿繪馬鉾馬銀面菖蒲形
同　鉾馬頸総同八子同雲珠同杏葉　馬上沓
舞人辻氏藏燧袋
和州三輪社藏大塔宮毋衣絹
以上五十五品上卷載之
和州法隆寺藏聖德太子翫甲冑
山城國藤杜社藏崇道天皇御甲冑
石清水社藏源義家朝臣甲冑

同　藏唐櫃附前之字
鞍馬寺藏源義經朝臣甲冑同冑古鉢同龍金物
八
小笠原佐渡入道法雲藏鐵面具
春日社本談議屋藏楠正成胴丸
南都興福寺藏本談議屋庫中獅頭
同丶藏梅檀板鳩尾板
島津氏家藏廷尉忠久鉄杏葉　半首之圖　半
首別式大立擧臑當
一條亜相御家藏萎烏帽子、

行廿字

毛利家藏鎧直垂
吉野郡九ヶ村民藏南帝御物胴丸
南都興福寺藏源義經朝臣甲冑半形同鎧註文
以上廿品下卷載之元文五年五月梓行之
一　古樂圖　一卷
此圖は以少納言入道信西本追加入之在別記擧
了處は
霄鞁　揩鞁　揭鞁　篳篥　奚婁　簫　箏
横笛　五絃　尺八　琵琶　筌笙　箜篌　方
啓　以下舞　按摩　皇帝破陣樂　蘓合香　皇

麞　秦王破陣樂　打球樂　柳花苑　採花老
蘓莫者　蘓芳菲　新羅狛　獅々舞　羅陵王
新羅樂　入壷舞　猿樂通令輪　飲刀子舞
四人重立　吐炎舞　柳格倒立　神姪登　縄
弄玉　弄釵　三童重立　柳肩倒立　弄玉
卧釵上舞　入馬腹舞　倍臚　是より無名之
圖在六種

奥書

三條宮書御室繪舞銘當今宸筆
寶德九年九月　日

一　舞臺圖　一卷

下間少進法印仲康編

此圖は能之舞臺の式を録す初左構右構之間より金春勸世五段の次第或は舞臺置物之ヶ所を詳細に圖せり

奥書

于時慶長元年居諸

下間少進法印仲康花押

此少進法印は本願寺の家臣なれと有名なる其比能師にて豊太閤に愛せられし事は老人雜話

に載せ又徳川家康公駿府御城に召されして興行ありし次第は羅山之政事録にも見えたり

一紀中納言物語　一巻

土佐将監光成画

此画は中納言長谷雄卿朱雀門之樓上にて鬼神と双六之勝負せられ美女を得約を違え水と消失し戯れ物語なり慶安四年辛卯三月之奥書あり

一職人歌合　一巻

法眼狩野永徳画

烏丸大納言資慶卿賛左右二十四番歌は題月

巻首醫師

村雲のかくれる月のくすりにはよるのあらしそなるべかりけり

一建保職人歌合　一巻

此篇題は月と戀とにして廿四番歌合也作者及画工とも知らす後年甘露寺親長卿之職人歌合もあり混する勿れ

伊勢貞丈曰去年北村春水翁の物語に職人歌合はあまた品ある物なりと云々又異本あり

校合するに歌并判之詞は同しく繪は異なり
画工別人なるべし又哥は飛鳥井二樂軒之筆
画者の名の知れさるもあり兼文見る處此余
に三種あれと略之了

一 十界圖 十五幅

近江國坂本来迎寺所傳繪者寺傳に巨勢金岡之
筆と稱すれと其賛者は恵心僧都にて誤れる事
を先輩にしおさ〳〵説あり然るに近時東京博
物局にて巨勢弘高之筆なりと審定せらる圖中
騎馬之体家屋之様葬送之姿烏帽子の形其余中

村甘字

世之有様考證にすへき事いと多し
兼文曰十界之圖舊三十幅也内四聖之圖十五
幅は元亀之乱に比叡山に於て焼失し六道之
圖十五幅を今に傳ふる處なり

一 請雨経法差圖 一巻

醍醐寺僧正勝賢書画

神泉苑之圖を巻首に載す祈雨法執行規式の圖
にして池は南面なり東の方阿闍梨房三間修理
職之所課西の方供所二間は木工寮之所課中央
の檀所五間三面木工寮之所課其外池之屋神供

所檀所審僧宿所及廿八流幡の圖壇上裝嚴之圖
大檀壇上之圖大曼陀羅圖敷曼荼羅之圖蓮廣壇の
圖十二天壇の圖聖天壇の圖水天壇の圖也
奥書
右任永久指圖注之彼時繪圖等頗髣髴也今任
彼記并先師口傳具圖之外見尤有憚不可出行
相耳于時壽永二年六月六日注之重猶可勘定
也
沙門勝賢
一三摩耶戒場之圖 一巻
山城國葛野郡梅ヶ畑郷栂尾山高山寺十無盡院

寢殿南向之様にして舊六條殿御所を建保二年
二月勝福院関白殿下より被移處なり
圖中に誦經机あり異風にして今世見さる式
也
一光明真言繪詞
豊後法橋画 三巻
此巻一に光明真言功徳辞とも題す詞筆者は毘
沙門堂中納言藤原為重卿なり惣て光明真言の
靈驗を画く繪少くして詞多し考證にすへき品
にあらす

奥書

右一部三巻東山八坂吉祥園院常経繪也

應永五年二月　日

一集古十種　八冊

桑名少将定信朝臣輯

此書曩に群書一覧に記載すれと遺漏三種ある
を以て爰に擧く蓋し其頃未刻なりし哉

名物古画之部　一冊

呉道子筆觀音圖　京師東福寺什物

同三幅對　中釋迦　左文珠　右普賢

同　同

同中觀音左右山水　同大徳寺総見院什物

趙子固筆墨竹二幅對　同南禪寺什物

徽宗皇帝筆桃鳩圖　木下家藏

牧溪筆菓子圖　二種　京師大徳寺龍光院什物

陳所翁筆龍圖　同

牧溪筆五幅對　觀音　龍　虎
猿猴　鶴

同方丈什物

雪舟筆金山寺圖

藝州家藏

同　育王山圖
牧溪筆觀音圖　京師東福寺什物
王摩結筆瀑布圖　同智積院什物
可翁筆二幅對蓮池鷺　同南禪寺什物
萬國禎筆睡鷗圖　同
牧溪筆猿猴圖　同大德寺塔見院什物
同　二幅對枯木鳥圖　同南禪寺什物
李龍眠筆龍之圖　同西賀茂正傳寺什物

牧溪筆寒山題壁圖　江戶湯島麟祥院什物
梁楷筆布袋圖
古畫肖像之部　五冊　京師妙心寺什物
應神帝　天武帝　聖武帝　二　崇德帝　後鳥
羽帝　二　聖德太子　九　阿保親王　鎌足公　四
不比等　二　武智丸公　二　藤原豐成公　菅神
十　平清盛　平重盛　日野勝光公　坂上田
村丸　源義家　二　源賴朝　二　源實朝　源賴
經　二　源尊氏　七　同義詮　同義滿　四　同義
持　二　同義教　二　同義勝　同義政　三　同義

尚　同義澄　同義暉
見宿禰　當麻蹶速　秦川勝　同義輝　同義昭　野
原業平　柿本人丸　六　小野篁　小野道風
藤原俊成　藤原成範　平經盛　平教盛　平
知盛　平資盛　平信基　幸壽丸　藤原定家
二　藤原為相　藤原藤房　平敦盛　平景政
源義光　源義國　平義明　平教經　平景時
平直實　源義經　源高綱　藤原朝綱　曾我
祐信　曾我祐成　平時賴　源貞氏　曾我時
致　藤原景綱　赤松則祐　源基氏　楠正成

細川勝元　細川澄元　太田持資　源氏滿
蜷川親元　齊藤義龍　別所長治　武田晴信
平信忠　蒲生氏鄉　加藤清正　桑山元清
直江兼續　定惠上人　義淵僧正　鑒眞和尚
行基菩薩　傳教大師　弘法大師　空也上人
慈惠大師　增賀　性空　西行　賴實上人
佛師雲慶　重源　文覺　四光大師　明惠
道範　聖一國師　二　四空上人　佛光禪師　二
佛國禪師　二　一遍上人　蓮聖居士　行四
士雲　顯尊和尚　一休　兆典司　策彥和尚

二　吳服　宍織　小野小町　紫式部　和泉
式部　廓御方　師典侍　大納言典侍　治部
卿局　廣徳寺殿　高臺寺　二　刀自　祇王
祇女　佛　文房之部　二冊
硯　硯箱　墨　机　文袋　文臺　詩嚢　夾
笔　墨滴
以上六十二圖　一巻
一　北野縁起
大納言為家卿画并詞書共　一巻

此圖白描にして彩色これなしといへ共極めて
殊勝なる画風信實朝臣筆の回縁起とは其圖大
ひに違ひすへて家屋人物共に少し小さく覺ゆ
詞書は艶にして美なり東京従五位青木信寅氏
の秘藏
一　世六歌仙畫像　一巻
藤原信實朝臣畫
詞筆者は後柏原京極攝政良経公なり華族佐竹家之
所藏にして歌仙中第一等之名画世上流布する
處の信實朝臣画と云へる歌仙繪の類ひにあら

す絶妙奇体の人物あり詞書また刻本にある筆
体とは高手似さる書なり

一　山水屏風繪　半雙

藤原基光筆

東寺所傳唐憲宗皇帝賜弘法大師處也然に土佐
家に所傳ありて近く基光之筆に鑒定を決せら
れる

一　華嚴祖師繪傳　六卷

藤原信實朝臣画

光明峯寺関白道家公　岡屋関白兼経公　開田
准后　西園寺太政大臣公経公　高辨明惠上人
以上詞書は五人にして唐土華嚴宗祖師之繪
傳なれは繪は高手絶妙なる乙我國に益する
之圖は更になし

一　福富草紙　二卷

土佐刑部大輔光信画

兼文曰此巻は洛西妙心寺に於て有名なる品な
りしか如何なる事にや現品を熟視するに光信
之筆を寫せし物にや東京に於て見る處此原本
と覺しきあり

此圖中の大意は福富の織部なる者習はすして
藝に妙を得大内へ召出され富榮へしか其となり
りにほくせうの藤太といふまつしき夫妻これ
をうらやみける物語なり

一 西行物語 四巻

海田采女相保画

詞筆者槐下沙門某とあり其名詳かならす此画
巻は京師一古家より出岡田式部大録為恭所蔵
之處近時大坂之商人より予友田中教忠氏之手
に属せり流布之三巻とは画も少し大方にて故
實を正せり藤原貞幹は一巻不足のよし記し置
たれと今全備するは為恭の補ひし画にはあら
て何れよりか取揃へたる物成へし

一 譽田八幡宮縁起 五巻

土佐刑部大輔光信画

河内國錦部郡譽田八幡宮之神寶にして石清水
八幡宮縁起と同物也足利将軍義教公御寄附左
の奥書あり

先年當社參詣之時拝見縁起三巻處事略繪不
圓備仍拾舊本之遺處更致新寫之功益顯既往々

靈驗為備將來之龜鑑謹寄進寶前數奉仰玄鑒者也

永享五年孟夏廿一日

征夷大將軍左大臣兼右近衛大將源朝臣

一弘法大師行狀記　十二卷

土佐刑部大輔光信画

藤原貞幹此画法は繪所領之筆にあらすと好古小錄に載たる處の什寶なり詞筆者は

卷一　大覺寺無品深守親王筆

卷二　一條前中納言公勝卿筆

卷三　六條中將有孝朝臣筆

卷四　押小路前内大臣公忠公筆

卷五　同

卷六　二條前中納言為重卿筆

卷七　四辻儀同三司季顯卿筆

卷八　成就院前大僧正果守筆

卷九　靈山大僧正實嚴筆

卷十　大炊御門三位入道明燈筆

卷十一　青蓮院無品道圓親王筆

卷十二　同　二品尊道親王筆

一弘法大師行狀記　十二卷

熊谷可昌画

前記光信之筆を寫す所にて同東寺之什物也此筆者熊谷可昌も何人にや所傳詳かならす詞筆者如左

卷一　大覺寺一品空性親王筆

卷二　日野新中納言光廣卿筆

卷三　昭光院准后道澄親王筆

卷四　舟橋式部少輔秀賢朝臣筆

卷五　近衛准后三藐院信尹公筆

卷六　同東求院禪閤前久公筆

卷七　高倉右衛佐永廣朝臣筆

卷八　中院中將通村朝臣筆

卷九　舟橋式部少輔秀賢朝臣筆

卷十　河野中將實顯朝臣筆

卷十一　青蓮院二品尊朝親王筆

卷十二　曼珠院二品良恕親王筆

外に外題一卷を添たり持明院權中納言基雄卿之筆也

此画卷之零本には光顯の筆もあり見事な

り

一　法然上人行状繪圖　四十八巻

土佐刑部少輔吉光画

兼文曰此画者を吉光と稱するは知恩院の什物にて則同寺之所傳也柴栗山之展閲目録には右画初両三巻之處は至極見事に相見へ候得共弟子寄合書にも候哉少々劣候様相見へ候處も有之候何れも殊勝の名物に御座候書中彼是故實等相見へ候と記す然るに近時東京博物局にて審定之上吉光外六人之筆とすれと寺傳により

行廿字

て吉光一名を記し置又詞筆者は

巻　一二三　後伏見天皇宸翰

巻　四五六　世尊寺従三位行尹卿筆

巻　七八　後伏見天皇宸翰

巻　自九至十三　青蓮院一品尊圓親王筆

巻十四　後二條天皇宸翰

巻十五　同月輪禪閣ノ下一品尊圓親王筆

巻　十六十七　姉小路従二位濟氏卿筆

巻十八　青蓮院一品尊圓親王筆

巻十九　世尊寺従四位定成朝臣筆同従三位行尹卿筆

巻二十　世尊寺従四位定成朝臣筆
姉小路従二位済氏卿筆

巻廿一　後二条天皇宸翰
世尊寺従三位行尹卿筆

巻廿二　同姉小路従二位済氏卿筆

巻廿三　世尊寺従三位行尹卿筆

巻廿四　姉小路従二位済氏卿筆
後二条天皇宸翰

巻廿五六　後二条天皇宸翰

巻廿七八九　姉小路従二位済氏卿筆

巻三十　青蓮院一品尊円親王筆

巻三十一　轉法輪三条太政大臣實重公筆

巻三十二　姉小路従二位済氏卿筆

行廿字

巻二十三至廿九　後二条天皇宸翰

巻四十　伏見天皇宸翰

巻四十一　姉小路従二位済氏卿筆

巻四十二　後二条天皇宸翰

巻四十三至四十八　姉小路従二位済氏卿筆

右目録一巻者東大寺別當前大僧正道恕筆也每巻背合縫足利將軍尊氏題花押

一親鸞上人繪傳　四巻

康樂寺淨賀法橋画

此繪傳は本願寺開祖之一代行狀記にして第三

世覺如上人永仁三年に編述せられ今世に到りては同宗之各寺には必しも此寫繪を所藏す依而其事を略す

一　日蓮上人注畫讃　五巻

窪田藤右衛門尉統景画

此画讃は京師本圀寺之什物にして則開祖日蓮上人一代之傳繪なり奥書に曰

天文五年申初秋於若州長源寺書之畫工窪田藤右衛門尉統景勸發師安立院大僧都日政

一　東寺伽藍古圖　一紙

此圖建久之後應永之前に記する處にて四方に土塀あり是文覺上人之勸進する建久之修覆なり其退轉せしヶ所には四方之廻廊僧房東西之勅使房中門二ヶ所寶藏一ヶ所講堂前左右之鐘樓經藏八幡宮等其沿革殊更に甚し

一　法金剛院古圖　一紙

山城國葛野郡花園村並岡五位山法金剛院之古圖にして大治年間待賢門院之御再建ありし比の繪圖なり寺内の廣大なる堂舍之美麗なる其世の壯觀實に想像すべし又南東には大なる池

あり此池は忠度朝臣詠歌集に

法金剛院にて池邊紅葉といふ事を人々よみ侍しに

青葉をは池の水草にまかへつゝ色つく枝を影はみへける

とよみし池也其外世々の撰集に此池をよみし歌多し此池は清原夏野公之舊舘吉田兼好が住し處なり

一豊岡神社古圖　一紙

洛東妙法院之什物にして慶長三年建社之古圖

也神廟は阿彌陀ヶ峯の頂上に巍然として二重の廻廊中門及び諸建物之美麗裝觀其世の様をみるに足る又山頂より麓に到り左右には諸侯献納之石燈籠三百七八十箇あり現に大佛塀内に十四五基を存す其余諸侯之邸迄圖けり

一北野縁起　八巻

画藤原信實朝臣

詞後京極攝政良経公

此縁起は根本縁起と稱し北野聖廟之什寶也

巻第一の跋に曰

北野聖廟縁起不慮紛失其所在不知空送歳月已
久于爰目代照世索求于四方得古縁起八幅於泉
南大寺之大蔵中雖然欲償之不容易故謁縣令石
田木作尹請遂写望縣令感照世志深切而文禄五
稔秋遂以得令終素願不勝抑躍抱以奉備寶前也
可謂合浦珠去復還矣嗚呼是亦非神慮感徳之盛
乎于時慶長第四暦己亥夷則七日北野寺務無品
親王記之
第二巻以下之跋
慶長第四己亥年七夕　覺円親王書之

兼文按に石田木作尹者治部少輔三成之兄にし
て領一万石堺政所之奉行たり木工頭重成と種
す関ヶ原之乱其事に関係せすと雖も連座によ
り領知没収せられ其行衛を知らす

一　北野縁起　残欠　一巻

権大納言為家卿書画

此巻白描にして清涼殿落雷之段殊に目覚しく
東京青木信寅氏之珍蔵也

一　大安寺古圖　一紙

此寺は推古天皇治世廿五年聖徳太子之御建立

にて和州添上郡にありしか中世廢絶せり此圖は其盛立の比を繪きしものにて惣門の中左右に推古天皇の御廟聖徳太子之御堂并立し五重塔は三基まてありしなり

一 唐招提寺古圖 一紙

天平寶字二年和州添上郡新田部親王之舊舘を以て冥福の為め此寺を修造せられし時の圖にして寺外北西の方に親田部親王之御廟あり四圍池にして山陵と少し異なる處なく今は現に帝陵と混せしやと覺ゆ考証家の見るべく心

得べく圖なり又寺内之沿革は有名なりし戒壇院の立派なる西の屋の壯麗なりし今の惣門は中門なり現に存する處は十中之四斗り今世の衰態を以往昔の様子を見る實に佛者の歎する圖也

一 集圖合結 五冊

桑名少将定信朝臣輯録

此集は文政年間徳川氏執政盛世に方り日本國中に存在する處の城圖を輯め彩色を以て山川及ひ廓郭を分ち其町間をも悉詳に記す極微細

なりと雖漏なるとの二種あり城圖にも密と踈とのあるは外様諸侯の忌みて其實を告けさる故せまゝ古城圖を加ふ其目は

城州伏見古城圖　大坂篭城人數配圖
河州八尾舘之圖　播州茶臼山陣營圖
遠州小山城圖　駿州興國寺城圖
甲州古府中城圖　同江尾古城圖
同新府中城圖　同久野古城圖
同郡内岩殿古城圖　相州延澤古城圖
上州吾妻岩櫃古城圖　江州海津古城圖

信州諏訪原古城圖　信州望月古城圖
備前下津井古城圖　豊後日田古城圖

以上

一　二巻

融通念佛緣起

嵯峨清涼寺什寶

画所預散位藤原朝臣入道寂濟栗田口民部法眼
隆光前画所備後守藤原光國画所土佐守画師大
輔法眼永春藤原行廣春日画所行秀等之繪にし
て詞書は應永廿一年なり清書人を知らす

一　三巻

北野緣起

北野天満宮什寶

画者土佐守藤原光信 詞筆者三條西内大臣實隆公号逍遥院殿天神御一代之記なり

一 誓願寺縁起 三幅

洛陽誓願寺什物

繪者海北友松にして詞書なし

一 向阿上人繪詞傳 三巻

古硎和尚贊北向雲竹書

向阿上人は洛陽浄花院之一代浄土門之中興にして其達徳之難有事共をくわしく書記す

一 空也上人繪詞傳 二巻

画詞書共筆者詳ならず

念佛之元祖にして一代之行業を記す此上人に尋ては惠心僧都源空上人等専ら唱名念佛を執し諸人濟度ある之其初めを詳にせり

縁起之部

一　四天王寺縁起　　写　一巻

聖徳太子御撰

一名御手印縁起と云大略に曰四天王寺法号荒陵寺荒陵郷荒陵東建立故以虎村字号寺名發願四大天王故曰四天王寺故田院東西栁町南北陸町東百濟郡堺南堀河西荒陵岸北三條中小道乾角建施薬院艮角建悲田院北中間建療病院是参院在寺垣外敬田院斯地内在池号荒陵池其底深

十行廿字

青龍恒處也以丁未歲始建玉造岸上改題此地鎮
祭青龍癸丑歲壞移荒陵東斯處昔釋迦如來轉法
輪所尓時生長者身供養如來助誰佛法以是因緣
起立寺塔此地敷七寔故青龍恒守護麗水東流号
白石玉出水以慈悲心飲之為法藥矣宝塔金堂相
當極樂土東門中心以髻髮六毛相加佛舍利六粒
籠納塔心柱中表利六道之相宝塔第一露盤誓手
鏤金表遺法興滅之相金堂内安置金銅救世觀音
像百濟國王吾入滅後戀慕渇仰攸造顯之像也在
百濟國之時佛像経律論法服尼等渡越是朝相當

欽明天皇治天下壬申歲也復律師禪師比丘比丘
尼咒師造佛工造寺工等相重渡送相當敏達天皇
治天下丁酉歲也假生王家下詔諸國以諸氏々人
々初令起立寺塔造佛経等尓時物部弓削守屋臣
深含邪心燒亡寺塔滅亡佛経當于斯時佛法将滅
悲泣懊惱奏聞階下發起軍兵討伐彼守屋定弓和
順慧斯遠逸中逆臣胷遂以落地驅攝守屋子孫従
類二百七十三人為寺永奴婢没官所領田園拾捌
萬陸仟捌佰玖拾代定永財畢河内國弓削鞍作祖
父間衣摺蚊草足代御立葦原等捌箇所地都集拾

貳萬捌仟陸佰肆拾代攝津國於勢損江鵄田熊凝
等散地都集伍萬捌仟貳佰伍拾代居宅参箇所並
資財等悉計納寺分畢守屋臣是生々世々相傳破
賊震旦漢土現男女身弘興佛法教化有情之時從
順吾身如影不離是身終後歷五百生發起大小寺
塔佛像崇竪六宗之教法今身建立八箇所寺院佛
菩薩像所製法華勝鬘經疏義毎寺施入封戸田園
在其員荒陵寺施入功封参佰戸在六國墾田拾貳
萬漆仟伍佰代在幡磨國鍈磨郡朝来部郷墾部等
左右両條内逆臣悪禽屢現揺動人心迷乱摸狹凶

行廿字

情掠取田地滅破寺塔是只守屋變現而已吾與守
屋如影與響寺塔滅亡國家壞失共自此佛像什器
領所等ヲ詳細に記載あり奥書には乙卯歳正月
八日皇太子佛子勝鬘然して御手印廿五箇所に
押す明治六年三月十三日兼文不測而於此宝庫
令拜覽且後醍醐天皇宸翰之副縁起をも併せて
拜讀す此巻には左之奥書を被記

建武二年乙卯五月八日拜見之同月十八日書
写之權者之聖跡輙不可披閲仍為擬正文令染
短筆自今已後不可出堂内矣

右寺院田園任記文可興隆之雖為殷歩有遅濫之地者速加朝威可令全施入地者也抑當寺佛法最初之靈地王道擁護壇場也若非此寺者可帰何寺乎寺院再興朝家之再興時運相應者定復古跡歟正法紹隆万姓利益偏助成彼曩願敢不加朕新意而已

乙卯歳孟春八日乙卯歳仲夏八日不測而歳日相合似有冥應矣

此太子真蹟及後醍醐天皇宸翰共攝州四天王寺之什宝也

行廿字

一神宮寺伽藍縁起　一帖

巻端曰桑名郡多度寺鎮三綱謹牒上と記す延暦五年長官紀朝臣佐婆麿介井上直牛甘大目大伴直赤椅少目春戸村主廣江等任時所進也錄する處は天平寶字七年十二月滿願禪師造佛之次第より寺内之資財顯注す第一佛物佛像経巻第二塔　二基第三法物第四布薩調度第五樂具第六僧物第七供神料器第八通物第九太衆第十鋪設等奥書に曰延暦廿年十一月三日願主沙弥鎮脩行住僧知事脩行入位僧連名檢察伊勢尾張之大少國師

僧細以下連署悉く僧細之朱印を押捺す蓋し此
縁起資財帳は神宮寺一伊勢國師一尾張國師一
僧細所一と四巻製する之内僧細所之品にして
江戸人狩谷掖齋之所藏する處柏木探古氏傳来
せり

一　廣隆寺縁起　　写　一巻

權僧正濟承著

山城國葛野郡楓野大堰郷廣隆寺之由来記也當
寺は秦公寺蜂岡寺桂林寺三槻寺等等之五寺号あ
り推古天皇（十一）三十年大花上秦造河勝奉為上宮太
子所建立所也本尊金銅彌勒并像者推古天皇十
一年自百濟國献之觀音像者同廿四年自新羅國
献之藥師如来は向日明神權化神作也此三尊を
則本尊とす以下諸佛之由来并奇瑞及諸堂諸院
之記事鎮守三十八所之事秦氏之系圖廣隆は川
勝之諱也當寺之中興少僧都法眼道昌の傳次に
寺外末寺并別院之次第寺領庄薗等之事埋木地
藏縁起寛喜二年永万元年當寺供養之記等を載
たり抑此寺は弘仁九年四月十九日天禄二年七
月五日久安六年正月十九日等三度之火災文明

三年八月八日同七年八月六日両度大風にて吹
倒せり明應八年七月之編輯書かり

一河内國小松寺縁起　写　一巻

舊号荒山寺河内國交野郡上之山にあり其形八
葉にして如二己削成一似二靈山一此峯に古松あり菩薩
遊戯之處也和銅五年四月十八日田原卿人字紀
八其子若石丸宗次郎其子熊王丸中四郎其子松
若丸此三童入二彼山一建二方五尺草堂一請僧円舜本尊
石佛を供養す其後養老年中為二雷火一焼亡同七年
七月十三日為二建立一引地之時地の下に有二石碑一
面一有一銘天長地盛白衣菩薩弘法利生と諸人隨喜
天平元年為二地震一破壊天長元年再立承和四年火
亡同十二年清原行光成二大願主一成就其後延長八
年正月小松景光之靈佛果を得る事又奇瑞之小
松生出是より小松寺と改号此時之供養文は紀
納言の作也承平元年正月藤井清光金堂を造り
天慶二年八月紀行將講堂を立安和元年七月食
堂成就承暦四年二月畷沙門堂造立其後大治五
年九月大地震堂舎吹崩沙門觀円勧進再造状あ
り次に奉加帳を載す二月會諸卿寄附書久安元

年二月勅宣二通承久二年二月開御帳之事に了

一　觀心寺縁起　写　一巻

巻首に觀心寺縁起實録帳と記す編中に曰堂壹院在河内國錦部石川両郡南山中合山地千五百町初め雲心寺と云弘法大師之開基也承和三年閏三月十三日之官符同四年三月三日真雅實慧両僧之勘録也奥書に曰

此縁起於正本者在江州石山寺經藏仍稱座主相承不出寺内殊以令秘惜云々

然者於向後者併以写本擬正本可備亀鏡者也

十行廿字

應永元年十月十五日　大上天皇熈成

此に大上天皇熈成とあるは南朝第三主後亀山天皇之御諱にして當寺は後村上天皇之行在所とも成り又三帝共行幸ありし寺にて御宸翰ありし事にやと覺ゆ

一　鑑真和尚東征傳繪縁起　六巻

此編は大唐之鑑真和尚天寶十三年（玄宗皇帝之治世也）甲午于時年六十七にして来朝す我朝は天平勝寶六年也二月四日入京此時海上に於て颶風に逢ひ舎利を投し種々の奇瑞ありし事龍出現せし

事其法に復せし事佛法之あら〳〵此和尚之一
世之記事を著す五巻は繪あり一巻は書のみに
て則永仁六年戊戌八月畫工(六)郎兵衛入道蓮行
筆師は足利伊与守之後室嶋田民部大夫行兼大
炊介入道見性美作前司宣方等之四人なり繪は
上手にあらすと雖も船之古製なとは見るに珍
敷考証の一助にも備ふへし兼文按に此来朝の
海上大難風危殆いふに堪へさりし事共にて鑑
真和尚は遂に此難により盲目となる現に唐招
提寺之像を見よ然るに世間往々光明皇后御願
経之奥及ひ或は此和尚之筆蹟といふ写経あり
可疑唐傳来はいさ知らす入朝後は更に執筆絶
而あるへからすと云々

一 清水寺縁起 三冊

清水寺別當僧都覺源編

此編は大和國高市郡八多郷小島寺超忍大徳之
門子延鎮光仁天皇御宇寶龜九年四月一八日觀音
之靈告により初て洛東音羽山下滝水之側に草
庵を結ふ事行觀居士教待和尚之事延暦二年坂
上田村丸延鎮に逢ひ給ふ事田村丸室家三善の

高子觀世音之靈符により病惱平癒清水寺建立
の事化僧千手觀音之像を作り給ふ事桓武天皇
御腦延鎭爲加持奇驗有之事子安塔之事田村丸
夷賊征討觀音加被力之事延曆十四年十月十四
日太政官符清水寺四至之事弘仁八年當寺住侶
慶兼阿闍梨西門之二天王造立につき靈驗にあ
つかりし事延曆十八年藤原公敎觀音に祈禱し
て男子を得る事同廿年源秀顯女子を得る事左
衛門尉家光美女を得る事田村丸鈴鹿山にて奇
賊を追討靈驗を蒙る事大同元年紫宸殿を賜り
て本堂となす事坂上家系譜田村丸略傳之事弘
仁四年八月右兵衛尉庶定渡唐歸朝之砌於洋上
靈驗を得滝宮を建立する事貧女良緣を得る事
追加上總景清主馬判官盛久被助命事等を記載
す

追加奥書曰

建久元年三月十八日　清水寺別當僧正覺眞記焉

一石清水緣起　二巻

此緣起は繪卷物にして繪は土佐彈正忠廣周之

筆載る處仲哀天皇崩御之段神功皇后備後之海
にて御危難の段門司関にて老翁不思儀之事三
韓降伏の段皇后新羅國に碑石を殘し給ふ事應
神天皇御誕生之段宇佐八幡宮御造立之段護國
靈驗威力神通大自在王菩薩と御詫宣之段和氣
清麿之段行教和尚神託に依て男山江八幡宮御
遷座之段等にて義教将軍奉納せられし處也左
之奥書有之
為貴三所之威光尋取両巻之縁起則致新圖奉
納尊前早鑒敬祖之志彌垂感應之睠矣

十行廿字

永享五年孟夏廿一日
征夷大将軍左大臣右近衛大将源朝臣

一　三國佛法傳通縁起　三冊

東大寺沙門凝然著

此編は就三國示傳法迹一明天竺宗源二陳震旦
傳法三述日域弘通其次第者天竺傳法傳通震旦
佛法傳通毗曇宗成實宗戒律宗三論宗涅盤宗地
論宗浄土宗禪宗攝論宗天台宗華嚴宗法相宗真
言宗大日本國諸宗傳通三論宗法相宗華嚴宗倶
舎宗成實宗律宗天台宗真言宗等之記事也奥書

于時應長元年辛亥七月五日於東大寺戒壇院述之

華嚴宗沙門　凝然　春秋七十二

造此三國佛法緣起三卷奉為　叡覽献上大覺寺法皇御所于此御所　叡感以此草本最初写之畢

沙門凝然造此佛法緣起并十重唯識瓊鑑章一卷心要義鑑一卷進覽之其中十重唯識者奉勅命於御前委細講讀之了彼十重唯識之後顯示華嚴宗義諸門八十餘科法門長行問答略釋後奉偈頌有八十五條八十三欲皆綴四韻於中二

行廿字

頌五言四韻唯識惣結八韻述懷四句二韻愚草遊心頌百首之内抽出八十三頌載之心王等五種唯識本覺業等九相及三祇頌合十七條不載之彼載列諸頌瓊鑑唯一本書在　法皇御所而已戒壇示觀律師學該乎三藏智弁汗瀾焉空有性相猶庖丁之於牛也且所遺之心盡凡千有餘卷焉然不出卷而投諸宗之閫域知三國之傳通者莫若乎斯書也苟從事于此者豈不云乎回千里之迷途者一呼之力也不遇於此說則吾終昧於大方者邪所恨未約刊行所利不廣仍命工鋟

應永卯己年正月日

一延暦寺護國縁起　　写　二冊

此處に錄する處は日吉山王七社之事朝家以當寺尊崇他に超過之條々を擧け末の四條は真言宗東寺を謗る之事多き中に勤操弘法を以傳教の弟子となし又は真言宗の御修法は比叡山に濫觴すなとゝ之文を擧く

奥書

於武州兒玉郡金鑽宮大光普照寺一乘院談所

行廿宇

居住之間賜小濵普門寺源嚴法印御本書寫畢

右寫本者金鑽第六番住持法印運討御自筆也

文安四年丁卯六月十七日　　天台沙門大武智嚴

一大峯藏王堂縁起　　写　一冊

青蓮院宮尊朝親王編

當藏王堂は天智天皇之御世役行者小角之開基にて其後延喜帝之御時聖寶尊師中興す然るに七百年に余り大破を造營せむと勸進の為述る書にて此權現は悪魔衆生濟度之因縁を経中よ

り抄出するに役の行者の誕生より其一世中の
法驗を荒増に錄す

一　桑實寺緣起　二巻

近江國滋賀郡桑實は天智天皇の御願定惠和尚
之開基する處也然るに此緣起は繪巻物にして
其次第を荒増に書綴れり繪は土佐刑部大輔光
茂筆詞は後奈良院之宸翰青蓮院宮尊鎮親王三
條西内大臣實隆入道遥院之三筆なり奥書に
曰

天文元年八月十七日

征夷大將軍權大納言源朝臣花押　義晴公

一　多武峯緣起　一冊

權大僧都宣賀撰

藤氏始祖鎌足公誕生より入鹿父子の逆悪天智
帝鎌足と謀り大極殿に誅する之始末白雉三年
山階寺建立天智天皇八年十月十六日薨去攝津
國島下郡阿威山に葬るの後其御子定慧和尚唐
土より帰朝大和國今の多武峯に其靈墓を移し
和銅三年興福寺建立維摩會之事實性僧都增賀
上人之事等まて記す破烈記を附錄にす此尊影

破烈は昌泰元年より慶長十二年に到り凡三十
五度也要く事變あり告文使登山之次第をも録
せり

一國上寺縁起　　写　一冊

越後國蒲原郡弥彦之本寺にて椎名國師為開基
國上山は古志郡にありてこしの山といふ名所
也聖徳太子巡狩之時此山に登り雲上記を製し
御手自大慈千手の像を安置し給ひしより越後
鎮護佛法最初とはなれり國上山一名雲高山又
は雲上山とゝいへり今蒲原郡に属す役行者も
此山に来住す弥彦大明神は元明天皇御宇草創
孝謙天皇之御宇國中上一寺之勅宣ありしを中
略して國上といふ也此書始めに和銅年中の事
より天平大同貞観年中之事を書續き次に治承
文治等の事を記す頼朝之下知状義経在銘之大
黒天之事なとをも併録す

一三井寺假名縁起　　写　一冊

長円僧正著

近江國滋賀郡長等山園城寺之縁起にして三井
之事智證大師園城寺開基之事新羅明神之事な

とを記し奥に天正九年七月十五日京より来り
し女人當寺の鐘をつきけるに其儘聲とまりぬ
これ先代にもありし凶事にて三の不思議あり
第一程なく讒言にて堂舍僧房破却せらるゝ事
第二經論聖教燒失之事第三照高院道澄准三后
遠行御弟子二品親王興意師道をうやまひ給は
す寺中不折合之事をしるす

一　執金剛神縁起　写　一冊

此縁起も繪巻物にして南都東大寺へ聖武天皇
行幸之圖あり少しく其圖により考証の助とす

十行廿字

へきの外採用なき品なり繪者土佐將監行盛詞
筆者一條禪閤兼良公也

一　石山寺縁起　七巻

近江國甲賀郡石山寺之繪縁起にして今傳ふる
處古縁起は六七之両巻を欠く新寫は松平樂翁
君所献にて全備也巻之一二三は繪者粟田口法
眼隆光一説には高階隆兼之筆なりと詞書は中
園相國公賢公と座主果主僧正巻四繪者土佐刑
部大輔光信詞書二條為重朝臣巻五繪者土佐光
茂詞書三條西實隆公也新寫は巻一繪者狩野安

信詞書水無瀬兼俊卿巻二三四五は画者土佐光
起詞書飛鳥井雅章卿巻六七は繪者谷文晁詞書
飛鳥井雅章卿也

一　高山寺縁起　　写　一冊

沙門高信撰

山城國葛野郡梅畑村梅尾山高山寺之縁起也本
者愛宕山之一谿神護寺之別院也土御門天皇建
永元年十一月後鳥羽上皇之院宣に依て梅尾寺
院山内を分而明恵上人に賜ひ永く華厳興隆之
勝地と為し寺を高山寺と号せらる後堀川天皇

1行廿字

寛喜二年庚正月太政官符を被下四堺之牓示を
定む金堂阿弥陀堂三重寶塔羅漢堂経蔵二宇鐘
楼鎮守社壇四宇大門禅堂院石水院禅河院四至
之事平岡善妙寺之事紀州處々遺跡之事以上其
由来及本尊其外建立之旦那之姓名より年月等
を委く記す奥書に曰
建長五年辛丑三月日依蒙仰隨勘得粗注進之沙
門高信
此に師と稱するは喜海上人の事にて明恵上人
遷化廿二年に著す編也

一　真如堂縁起　三巻

洛東黒谷真如堂は正暦三年戒算上人之開基する處にして有驗無比之高徳也天喜元年正月廿七日九十一才にて入寂あり此堂舍建立の荒増を記す繪巻物也跋に曰

此繪三巻住持昭淳僧都命画工掃部助久國令圖之詞者古今見聞之靈驗等粗抽詮要法務前大僧正公助草之誠是寺家未来際之珍奇也道俗貴財一見之輩須為滅罪生善往生極樂之良因而已

行廿字

于時大永四歳次甲申八月

遍照金剛入道親王尊鎮記之

一　金剛院縁起　写　二巻

丹後國加佐郡鹿原村慈恩寺金剛院之縁起にして當寺は天長六年淳和天皇之勅命に因て平城天皇之皇子真如親王初御名は高岳親王伽藍創建し給ひ貞觀四年十月真如親王御入唐元慶五年十月五日天竺羅越祇國に於て薨御其御遺骨當山西南之巓に奉埋天安年間文徳天皇水田五百五十町四段百八十歩勅賜あり保延二年八月白河上皇

造建三層寶塔梵鐘之事諸堂鎮守之事等を記す

一 譽田八幡宮縁起　五巻

河内國譽田八幡宮之什寶にして繪巻物也繪者
社傳に土佐刑部大輔光信之筆と云詞筆者寄合
書本文之大体は石清水縁起同一のものにして
少し増加する處也跋曰
先年當社參詣之時拜見縁起三巻處事略繪不
周備仍拾舊本之遺更致新寫之功益顯既往之
靈驗為備將来之亀鑑謹寄進寶前數奉仰玄鑒
者也

1行廿字

永享五年孟夏廿一日　義教公也

征夷大將軍左大臣兼右近衛大將源朝臣

写　一巻

一 瑞泉寺縁起

尾州丹羽郡犬山莊青龍山瑞泉禪寺之縁起にし
て當寺は應永廿二年日峯和尚創建する處也日
峯は洛妙心寺中興大濟禪師之事也附記に瑞泉
寺物語あり巻末に當寺十景之詩を載す僧象海
之題する處なり

写　一巻

一 醍醐寺縁起

山城國宇治郡醍醐村笠取山三寶院之縁起にし

て當山之開基聖寶僧正諡号理源大師誕生より
薨去に到るまて一世中之法験を荒増に記し當
山開發に種々之奇瑞ありし事より青龍權現鎮
守之次第を詳細に述ふ古書にあらす明暦年間
に綴りし縁起なり

一　融通念佛縁起　二巻

山城國葛野郡上嵯峨村清涼寺釋迦堂融通念佛
之繪縁起巻物にして此念佛は弘安二年より始
まり其濫觴より奇瑞之ありし次第を述ふ清涼
寺之什物に傳来する處の繪者は土佐守行廣修
理亮行秀大夫法眼永春其弟六角繪所寂濟民部
隆光備後守光國等之合作也又並岡村法金剛院
に傳ふ處は詞筆者八條宮智忠親王繪者住吉如
慶也

一　法金剛院縁起　一巻

繪詞筆者共知れす葛野郡花園村天安寺法金剛
院之繪縁起にして當寺は天安年間之草創なれ
と大破に及ひたりしを大治五年十月十五日待
賢門院之本願にて建立成就導師は仁和寺覺行
親王なり風景絶美之雅地に加ふる清池ありて

櫻花紅葉の名木あまたを植られ其比之撰集には此庭園を詠する和歌多く載られたり

一 妙音山縁起　写一巻

山城國乙訓郡山崎觀音寺之縁起にして本尊觀世音は聖徳太子之御作也元禄十六年九月十六日正親町正二位前大納言藤原公通公之書外題は後水尾天皇之宸翰此時之住職以空僧正は五朝之御帰依僧により賜ふ處なりと云

一 千光院縁起　写一巻

沙門性純撰

千光院ハ讃州八島寺ヨリ開基ハ鑒真和尚後弘仁元年二月空海當院ヲ建立以来應和安和天禄年間等種々ノ奇瑞ヲ擧ク奥書ニ曰

于時治安元年三月九日

一 象頭山縁起　写一巻

南禪寺元良撰

此書ハ讃岐國那珂郡象頭山金光院則金毗羅神社ノ縁起ナリ奥書ニ曰

右縁起應金院權大僧都法印宥寛之求請誌焉

屋嶋寺南面山性純判

前南禪見僧錄最嶽元良

一 白峯寺緣起 一冊 写

少納言入道常窓撰

讃岐國白峯寺ハ弘法大師此上ノ峯ニ寶珠ヲ埋ミ阿迦井ヲ堀り行給フ其後智證大師ノ建立ニテ貞觀二年四十九院ヲ草創シ千手觀音ノ像ヲ安置ス保元二年八月三日崇徳天皇此所ヲ行在所トナシ三ケ年ヲ送り給フ其後國符甲知御遷座長寛二年八月廿六日崩御安元三年七月廿九日御追号社壇ヲ立治承ニ

八青海河内文治ニ北山本ノ地等ヲ御寄進五部大乘経御書寫之事ハ御門天皇御事為義為朝影像ノ事永德二年十月十九日火災細川頼之夢想ノ事抔ヲ記ス

奥書

當寺事代々舊記雖有之未載緣起之間今度再興之次以記錄等奉示清少納言入道常窓草之侍従行俊卿清書之為後證注之

于時應永十三年孟秋廿五日也

写

一巻

一 金剛院緣起

中山素竹著

丹後國加佐郡鹿原村慈恩寺金剛院ハ天長六年
淳和天皇ノ勅命ニ因テ真如親王伽藍創建シ勅
願ノ道場トス貞觀四年十月親王求法ノ為御入
唐元慶五年十月五日天竺羅越祇國ニ於テ薨去
其御遺骨ヲ當山西南ノ巔ニ埋メ奉リ今字王塚
ト云天安年間文徳天皇水田五百五十町四段百
八十歩勅賜アリ永保年間白河天皇御再建ノ以
来古文書ハ天正年間ノ兵燹ニ罹リ焼却ス文禄
年間又子院多ク廢絶セリ元禄十一年九月舊記
摘録ス古縁起ノ焼失スルヲ以テ也

行者守

丹光院は讃州八島寺

行廿字

十行廿字